

野谷文昭  
司会

高田康成

奥田隆男

大岩昌子

# 教養をめぐる

## 冒険



### 教養のイメージ

野谷・司会 今日「教養とは何か」というテーマでお話しいただくわけですが、古くさいけれども今日的なテーマでもあります。ご存知かもしれませんが、文科省のホームページに「新しい時代における教養教育の在り方について（答申）」という二〇〇二年二月二日付の文書が出ていて、そこに教養教育を重視する方向での学部教育の見直しが求められているとあるんですね。しかも第一章が「今なぜ『教養』なのか」で始まっています。だいぶ前のものですがそのままなので、今でも指針

となつていると考えられます。しかし、全体を読んでみても、「教養」そのものの概念というか、それが何を意味するのかが今一つわからない。何かアプリアオリにあるものという感じがするのです。ご存知のように、我々の大学では、総合教養という一般教育に相当する組織が今年度をもって消滅します。先の官製の「教養」と、今新設学部や学科の名称に盛んに使われている「教養」はどう違うのか。

また、今回「教養」そのものを話題にする一方で、こちらの方がむしろ大事な気もしますが、この座談会を、本誌同様、学部や学科を越境する知的交流の場にしたいとも思っています。名古屋外大は小さいながらも外国語学部と現代国際学部からなつていて、今年度に世界教養学科が新設された上に、さらに再来年度世界共生学部が新設されます。ところが僕の見るところ、学部や学科間の交流があまりに不足しているようです。個々の学科には親密な空間が存在するのかもしれませんが、外からは見えません。そこで、この機会に意見交換を行つて、お互いに何を考えているかを知る。例えば盛んに使われている「教養」という言葉一つとってみても、考え方が違うのではないか、その違いに興味があるし、そのあたりを明らかにしたいのです。じゃないと、互いに海峡を隔てた島の村に住んでいるような感じがしてしまいます。

そこで、大まかな流れとして、ソフトな話から入って、ちょっとハードというかアカデミックな話をして、最後は再びやわらかく、楽しく終わりたいというふうに司会者としては一応考えています。また、交流するということで、この場ではヒエラルキーを感じさせる「先生」はやめて、敬称は「さん」にしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

ではまずソフトな話から。我々の世代というのは、概念とは

もかく「教養」という言葉が、単なるお題目ではなく、まだ生きていた時代を過ごしたと思うんですね。「教養」という言葉が日常的に使われていた。タイトルに「教養」という言葉が使われた本も結構出ていましたし。そういう状況で皆さんは具体的にどう思っているのかな。

例えば、高田さんの場合、「教養」という言葉を意識したのはいつごろですか。まさか小学校時代には「教養」なんていう言葉を知らなかったですよ。記憶がありますか。

高田 今、野谷さん、我々とおっしゃったのは、昭和二〇年代生まれ。

野谷 大岩さんは別ですが。

高田 恐らく野谷さんと私は同じだと思います。「教養」という言葉を最初に聞いたのは、岩波文庫を通じてだったかと。大正教養主義の枠組みでつくられていて、わけはわかりませんが、哲学的なものから文学的なもので、ドイツ語の翻訳（なかにはとんでもなく悪い翻訳）が延々とありました。一つのメルクマールとしては、ゲーテの「ファウスト」。だいたいはい読んでないんだけど「読んでない」なんて言えない。それで、そそくさと帰って、ひそかに読んだとかね。そういうイメージが「教養」です。

野谷 リルケとか。

高田 そういうことですね。要は、今の学生みたいに平然と「読まない」なんてはつきり言えなかった。

野谷 そうすると、今おっしゃったもの、文学ならトーマス・マンとかヘルマン・ヘッセとか、ドイツ関係のものを読むことが「教養」だったわけですか。

高田 というか、それが「教養」のイメージだった、あれは何なんだったんでしょうかね。知らないとかかまずいんじゃない

かと思っていたのですから、一応権威があった。

野谷 権威というのはかつて「教養」の特徴でした。

高田 はい。

野谷 権威ある本を読むのが学生の義務だったと。

高田 学生の義務ですね。おもしろいおもしろくないは別として。

野谷 奥田さんはいかがですか。

奥田 重みがあったのは、確かにそうだなと思いますが、これは個人的な気持ちですが、そういうものは絶対読んでやるか。あまのじゃくというか、高田さんが今まさにおっしゃった大正教養主義は、我々からすれば大人の世界の考え方でつくったものでしたから。

高田 我々というのは何年かな。

奥田 昭和二五年。

高田 同じだ。

野谷 なんだ僕が一番上じゃないですか、昭和三年ですから（笑）。



高田康成氏

奥田 大人の話は聞くもんじゃないと、大人のつくり上げているまさに教養的なものは絶対読んでやるかと。不勉強の言いわけとしてそう思っていました（笑）。好きなものを読むということとは当然ありましたけれども、あれ読んだとかこれ読んだとかいうのは。

野谷 でも「教養」なんていう言葉は使いたくもないと。

奥田 使いたくもない。それこそ読んでないんですが、阿部次郎の『三太郎の日記』、ああいうのに代表されるような世界です。

野谷 大岩さんはいかがですか、この中で一番若いんですけど。

大岩 飛びぬけて若いと思いますけど（笑）。

野谷 だから世代が違う。

大岩 世代は確かに違いますね。

野谷 「教養」というのを意識し出したのはいつごろですか。やっぱり学生の頃かな。

大岩 いえ、中学生の頃ですね。意識したっていうのは、英語の先生の影響です。とつても本のお好きな先生がいらつしゃつて、授業でいろいろな日本語の本を紹介してくれたのがきっかけだったと思います。英語の授業だったんですけどもね。その先生からは、授業でいつも、「皆さんは知的好奇心がなさ過ぎる」って毎時間のように言われていました。その頃から本をいろいろと読み始めたように記憶しています。

野谷 そういふ本は図書室にありましたか。

大岩 ありましたね。中学といつても中高一貫の私立でしたので、かなり大人向けの本もありましたから。

野谷 大人向けの本を読んだことを自慢するとかひけらかすような風潮はありましたか。

大岩 それはなかったですけど、さきほど言った先生は毎時間

披露していましたね。本屋さんにツケがたまり過ぎて、本が買えなくなったとかいう噂もありました（笑）。いろんな分野の本を紹介してくれましたね。哲学物が多かったように思いますけど。

野谷 恵まれていたんですね。

大岩 そうかもしれません。ただし私には奥田さんみたいな反骨精神なんかなくて、結構素直に読んでいたという感じです。そのときから図書室に入り浸るようになって、小説とか自然科学系のブルーバックスとか、そういうものもかなり手に取りました。

野谷 中学から大学まで滑らかに教養しちやつたということかな。

大岩 滑らかにというのは、どうなのでしょう。ただ、そういう土壌があつたというのは確かにそうですね。

野谷 もちろん反発なんかしてないわけでしょう。

大岩 していなかったと思います。

野谷 素直に受け入れた。

大岩 はい、そのころは素直だったんですね（笑）。

野谷 それは理想的ですね。

大岩 そうなんでしょうか（笑）。

野谷 少なくとも奥田さんとは違う（笑）。奥田さんの場合、ちよつと気になったのは、ご出身なんですが、ひよつとして関西ですか。

奥田 京都です。

野谷 やつぱり。どうもその辺が気になったので。

奥田 そうなんですか。

野谷 何ていうか、さっきの天邪鬼ぶりというのは、これはひよつとして京都人じゃないかと。

大岩 そういうことなんですか、奥田さん（笑）。

野谷 京都の中に、学風と言うと大げさですけど、そういう風潮がありませんか、偏見かもしれませんが。僕の知っている京都人は素直じゃない（笑）。

奥田 そうですかね。高校時代、学風と言えるようなものがある高校じゃなかったの。ひたすら軟弱な高校でしたよ。

元女子高だったところが共学化したところで、京都の高校の中では軟弱さを誇っていました（笑）。制服がなかったの、最先端のファッションを高校生がいかに身につけるかというのが競われていたけれど、私はそこに入れなくて、それを横目で見ながら、かついわゆる世間的な教養にもなじめなくて、何しとったんでしょうかね（笑）。

野谷 一瞬そう思いました。そうすると、批評力があつたというか、結構斜に構えていたということですね。それで『三太郎』は敢えて読まなかった。

奥田 はい。

野谷 何を読んでいたんですか。

奥田 座談会のテーマの「教養」ということかというと、そういうかつての教養主義的なものとは違って、同世代の間であれ読んだかこれ読んだかという話になって気にし出したのは、やっぱり吉本隆明です。

野谷 いきなりそこにいきますか。そうすると、六〇年代も後半。

奥田 後半ですよ。それまでは好きな本をただ読んでるだけで、それが世の中の流れに対してどういう関係を持っているのかは全然意識しませんでした。あの時代は文学全集が幾つもあった、その中で自分がおもしろいと思ったものをピックアップして読んだ。だから、世間とのかかわりを持った形で本を読

みたいと意識し出したのは、やっぱり吉本からですね。

野谷 彼は文学者であり思想家でもあります。奥田さんの場合は吉本の思想的なほうに惹かれたわけですか。

奥田 一冊挙げるのだったら、『共同幻想論』ですかね、やっぱり。

野谷 詩人というより思想家の吉本ですね。当時流行りましたからね。

奥田 『マチウ書試論』とか、ああいうのも読みましたけれども、さっぱりわからなくて。でも、何となく格好よさそうという。やっぱり格好よさを求めていたのかもわからないですね。野谷 高田さんの場合はいかがですか。当時読んで記憶に残っているものがありますか。

高田 実はあまりよく覚えてないんですけど、十代の後半ですよ。全く世代を代表すると思えないんですけど、僕はちよつと懐古主義で、どういうわけか加藤周一とかでした。エリート趣味ふんぶんのを、嫌らしいなと思いつつ読んでましたね。そうになると、当然ドイツ、フランスというのが中心になって、その辺で遊んでいたという感じです。

野谷 加藤周一というのはもともと医師で文学者じゃないですね。むしろ外れて出てきたような。外国、フランスでした。あつちへ行くことによって、逆に外から日本を見てああいう文章を書いたわけですけど、そのときに、その加藤周一という人をどう位置づけましたか。つまり、日本国内の知識人とあの人はちよつと違う気がします。

高田 違いますね。

野谷 どんな具合に。

高田 これもね、恐らくあとで話題になるかもしれませんがけれども、ある意味で「教養」と切り離せないものとして留学とい



野谷文昭氏

う問題があった。教養の本来ヨーロッパは遠かった。当時は一ドル三六〇円、一ポンド五〇〇円以上ですから、普通は行けないわけです。その状況下に加藤周一は自由にほうぼう動きまわっているのですから。

もちろん一方には戦後ですから、アメリカがあるわけです。ただアメリカには申し訳ないのですが、アメリカにはどうも教養はなさそうに思えました。もちろんあとで修正することになりますけど。そういう中で、いつ行けるのかわからないけれど『遙かなノートルダム』（森有正）を夢見ていた。もちろん吉本（隆明）とか、我々は「六八年」世代ですから、政治社会的なアンガージュマンは当然ありましたけれども、同時に、特にヨーロッパを中心とした悠久の歴史の中での知的な興味は捨てきれなかった。

野谷 そうすると、高田さんから、加藤周一というのは教養人に見えたわけですね。

高田 見えましたね。

野谷 その典型だと。

高田 典型ですね。医学を修めて、それでいながら日英はもとより独仏に通じるだけでなく、漢文にも通じて。彼の著作は戦後の物質主義的アメリカ一辺倒のものに比べると、非常に重層的に、重厚に見えた。

野谷 世代の違う大岩さんにとって、いわゆる教養書はなんでしたか。

大岩 高校生になってから読んでいたのは、専らというか、実は日本文学が多かったんです。特に三島とか川端とかですね。しかも、先ほどの英語の先生に推薦されたので、三島の『宴のあと』も、英語に訳された『After the Banquet』もついでに読むという感じで。そういう意味では、私ちょっと英語に毒されていた部分があるのかもしれない。しかも大学では英語を専門としてしまったんですね。

野谷 僕らの例を出すと、小学校のとき、あれは理科の先生でしたけど、その人が偉そうに蘊蓄を傾けるんですね。何しろ子供相手だから、いいかげんなこともしゃべったと思います。覚えてるのは、例えば、湯川秀樹がノーベル賞をもらったが、あれはただ中性子というものがあるんじゃないかと言っただけなんだというコメントですが、妙に感心しちゃうわけですね。へえー、この先生よく知ってるなと思って。白衣なんか着てたし（笑）。だから、僕はそのころは教養という言葉は知らなかったけれど、こういう人が教養人なんだとまずは思いました。

中学校では、国語の教師が文学青年で、中学校に入って英語を習い始めたばかりのときに、ドイツ語の詩を朗読するんです。当時はガリ版で、テキストを自分で刷って配ってくれるんですが、カール・ブッセの「山のあなた」なんかを原語でやる



わけです。感心しましたね、今思えばすごい教養人だった。その後その先生は趣味でカントだったかヘーゲルだったかを原語で読んでいたそうです。国語を越えた文学ということではその先生の影響が大きかった気がします。音楽でも芸大出身の女性で「おばちゃん」と呼ばれていましたけれど、その人から世界の音楽を学んだ。美術も西洋美術史をやったし。そういう人たちに何人も出会っているんですね。なんだか自分が成長した気がしました。その中で、自分なりの教養というイメージができてきたのかなと思います。

その中学校はすごいところで、まだアメリカ一辺倒でなくて、二種類の英語があった。つまり、教師の一人はアメリカ英語、もう一人はイギリス英語で、両方から授業を受ける。やっぱり違うんですね。発音は違うし、内容的にも違う。今思えば、そこで比較するという態度ができたような気がします。すみません、自分史を語ってしまいました(笑)。

大岩 すみません、私もさっきの先生の話に戻りますが、いろいろな本を紹介してくれたのはいいんですが、何と云いますか、してくださるお話が本からの引用が多かったなという印象があるんですね。ただの受け売りみたいな気がして、そこにはあまり教養が感じられなかった。偉そうで申し訳ないんですが、ほんと生意気な生徒だったと思います。つまりご自分の中でもう少し解釈して教えていたのだかと思ったりしていましたから(笑)。ただ知識を与えるのとは違う、もう少しその先生の考え方を含めた複層的な読み方なども教えてほしいとその当時思っていたんですね。今思えば、教養っていうのはただ博識なことではなくて、もっと総合知のようなものじゃないかと考えていたんでしょうか。

## 外国語に触れる

野谷 大学の授業にも当てはまる鋭い批評ですね。すでに評価を行っていた(笑)。すると、三島、川端からどうして英語やフランス語の世界へ行ってしまったんですか。

大岩 英語が単純に好きだったというのがありますが、英語をやっておけば潰しがきくんじゃないか、くらいの気持ちで進学しました。

野谷 この学生にもいそうですね。

大岩 さあどうでしょうか(笑)。それと、先ほど文学の英訳本を読んだ話もしましたが、日本語が英語に翻訳された場合、文体はどうなるのかといった、内容だけでなく、構造的なものに興味があったんじゃないかなと思うんです。

野谷 ここでまた自分史になりますが、高校に入って英語は続けますけれども、国立大の付属だったせいかフランス語かドイツ語を選択できたんです。単位には関係なく。まさに教養科目です。それでフランス語をかじったら結構面白くなって。もつとやっていたら、大岩さんと同業になっていたかもしれません。でもそこまで続かなかった。バレーボールに力を入れてしまつて。大学に進むと六八年の問題がありました。そこで大学がストに入り、授業自体がなくなってしまうんです。

高校ではフランス語をかじった程度ですが、それでも英語とは違う外国語をやることで視野が広がった気がします。中学までは歌集でしか知らなかった言語が大きく現れた。当然、背後の文化を見ますよね。それでシャンソンを歌ってみました。あの体験は大きかったと思いますね。奥田さんはいかがですか。奥田 私はそういう言語的な環境はとくにありませんでした。

全く普通の高校で、ほかの言語をやるということではなかったですし、英語だけで、それに追いつくのに必死で。言語で遊べるとかそういう経験はなかったですね。

野谷 そうすると、英語以外の外国語にはいつ接したんでしょうか。

奥田 大学に入ってから。

野谷 フランス語ですか。

奥田 いや、ドイツ語です。

野谷 当時ドイツ語はまだ勢いがありましたね。

奥田 社会科学のなところに入っていたので、どうしてもドイツ語のほうを中心かなと。私、経済学科だったものですから、何も考えずにドイツ語をとって、それで落第しそうになった(笑)。

野谷 ドイツ語をとると、やっぱりドイツ文化に興味が湧きますよね。

奥田 そうですね。ただ、どちらかというと、社会科学的な文献に目を向けることが多くなってきた、ドイツ語をやるんだしたらマルクスを読むとか。当時だったらローザ・ルクセンブルクを読むとか。

野谷 原典講読ですね。当時って何年ですか。

奥田 この年代ですから。

野谷 六八年。

奥田 ドイツ語もそういう関係で使っただけです。大学では文学をやった連中も周りにいましたけど、私のいた環境では、言語で遊ぶという感じはあまりなかったな。

野谷 ゲバルト・ローザなんて、今なら流行語大賞ものですが、ローザ・ルクセンブルクを知らなければ意味はわからないでしょうね。でもみんなが知っていた。そういう時代でした。

高田さんは、外国語に触れるというのはいかがでしたか。

高田 僕は実は高校に行かずに、当時出来立てはやばやの工業高等専門学校に誤って行ってしまった。都立航空高専というところでした。まだ卒業生も出ていなくて、僕らが三期ぐらい。ところが入ってすぐ心変わりしちゃった。「文転」というにはおこがましいのですが、ともかく英語は自己流ですが徹底的にやりましたね。ついでにフランス語もちょっとやりました。で、三年で中退して大学へなんとか入ったら、錯覚かもしれませんが、受験校から来た連中が英語の本をあまりにも読んでいないのに驚いた。待ってましたとばかりに、ギリシア語とラテン語だけは大学で習いました。あとのヨーロッパ近代語は全部自己流独学です。ということ、やっぱりヨーロッパです。それを一般的に「教養」と言うかどうかは問題かもしれませんが。

野谷 でも、週ればギリシア・ローマに行き着きますからね。

高田 そうですね。

野谷 大岩さんはいかがですか。

大岩 私は学部では英語を、大学院から本格的にフランス語を勉強したんですよ。自分が英語を教えるからフランス語を勉強している、英語をやっていただけの自分とフランス語を勉強し始めてからの自分とは大きく違ってきたというのは実感としてありますね。

野谷 具体的には。

大岩 大学院に入ってから、研究に必要だからという理由でフランス語を始めて、いつの間にかフランス語の教員になりました。

具体的にどういった変化があったか、よく言われることかもしれないですけども、日本語など母語だけだと、ものを見る視点が単なる点ですが、英語など一つ言語が増えるとそれが

線になって、そしてもう一つ言語が増えると面になっていくという見解がありますね。つまり物事を幅広く、多面的に見ることができるといことです。本当にそれは自分でも認識できるところがありました。

あと、ある言語を勉強すると、それに関わるものに引っかかりを感じるというんでしょうか。多分、その言語をやっていないければするつと抜けていってしまうものに対して、自分が関心を向けるという、そういったところも実感としてあります。

英語を専門にしていた当時はアメリカ文学でしたから、関心はずとアメリカを中心に向けられていたと思うんですけれども、やはりフランス語をやったことによって、自然とヨーロッパに目が向いていきました。野谷さんが先ほどおっしゃったように、つまり比較する視点というのも身についてきたんじゃないかなと思います。

## 食と教養

**野谷** 大岩さんはチーズに大変お詳しいですね。やっぱりそれはフランス語というか、フランスとの関わりによるのでしょうか。アメリカをやっていたら多分チーズというテーマは出てきませんね。せいぜいが「トムとジェリー」の穴あきチーズぐらいで。でもあれって本当はスイスのエメンタールなんですよ。

**大岩** そうです。アメリカですと、やはりCHEDARチーズ中心です。もちろんいろいろとありますけれどね。ただ、フランスのチーズの種類は圧倒的に豊富です。なにせフランスのド・ゴール大統領が三〇〇種類もチーズがある国を統治するのは難しいと言ったくらいですから、これはフランスの多様性を表し

ていますね。今の移民社会はまさしくこれです。フランス語をやっていないければチーズの勉強はしませんでした。これも言葉のおかげです。チーズの勉強を始めたのはカマンベールチーズ十種類を食べ比べた経験からです。作り方、熟成の仕方ではほとんど味に違いが出るのかとそれは衝撃的でした。

**野谷** 食の話が出てきたので、少しそっちの話をしようかと思っています。奥田さんは主にドイツ語圏を研究対象にされていますが、あまり遊ばない人みたいですね。

**奥田** 遊ばないですね。

**大岩** そうなんですか(笑)。

**野谷** 食についてはいかがですか。

**奥田** 食も全然ですね。ドイツはよく、イギリスと並んであまりおいしくないと言われていますね。知らないのにそういうイメージを持たれると、いやそんなことはない、声を大にして言いたくなる。いわゆる高級レストランのドイツ料理じゃなくて、道端で屋台の炭焼きのソーセージを、それも焼きたてを食べるのが何よりもおいしい。その程度です。洗練された食の世界のヒエラルキーの中で遊ぶなんて、そんな遊び方は全然してないですね。

**野谷** ドイツ語をやった人で、食通ってあまりいないみたいですよ。ビールの話はよく聞きますが。

**奥田** それは安心しました。私だけかと思った。

**野谷** オクタビオ・パスというメキシコのノーベル賞詩人が日本に来たときに面白いことを言いました。文化というものは、偉大な詩と料理を持ってこそオリジナルである、そして固有の料理、例えば、日本人は詩と料理を持っているが、しかしイギリス人は詩だけしか持っていないと断言したんです。慶應大学での講演だったんですが、会場は大爆笑でした。すると奥田さ



んは、ドイツへ行ったらいつでも熱々ソーセージの立ち食いですか（笑）。

奥田 それが一番多いですね。

野谷 もっとも僕もスペインに行くバルでもつばらタパスばかり食べますね。メキシコだとタコスばかり。だっておいしいんですよ、本場は。高田さんはいかがですか。

高田 最初に行ったのはイギリスです。アメリカのほうが数と質の双方で有利な奨学金があったんですけれども、行きたくありませんでした。しかしイギリスは本場にまづい。某国語学者がイギリスはおいしいとか言いましたが、嘘八百です。当のイギリス人だって認めているんですから（笑）。

ブリティッシュ・カウンシルの奨学金は通常一年でした。それをなんとか二年間居座っていたんですけど、最後の二か月だけは、指導教員に頼みこんでイタリア研修にしてみました。さすがにイタリアはおいしかった。すべてのヨーロッパ研究者



大岩昌子氏

は、最後はイタリアに落ち着くのです（笑）。

大岩 特に何がお好きですか。

高田 何でもおいしい。ただ、彼らは自信を持ち過ぎているから、同じものを食べているでしょ。あれはわからない。日本人は、いくらおいしくても、一週間ずっと同じものには耐えられないですよ。

大岩 そうですね。フランスでも結構同じものを食べますね。

高田 ヨーロッパはそうでしょ。イギリスはまずいものをずっと変わらずに食べている。ドイツもそうでしょうね。まずいものを飽きずに（笑）。イギリスが大英帝国で成功したのは、あれじゃないですか、食べ物はどうでもいい。

野谷 するとシェイクスピアなんかも、まずいものを食べていたのでしょうか。

高田 我々から見れば、そうに違いありません。伝統文化に個性というものがどうもあって、例えばイタリアの色彩感覚、ドイツの音楽感覚と哲学的分析力は、どうひっくり返ったって抜けるとは思えない。イギリスは味覚に対しては無頓着ですが、そのぶん言語感覚に秀でると思います。政治的センスもいいですね。

大岩 味覚に無頓着ならどこへ行っても暮らせるということですね。

野谷 ドイツを初めとしてヨーロッパでも北の人たちには南方志向がありますね。ゲートもそうですけれど。

高田 そうですね。

野谷 一つは、やっぱり食に惹かれるのでしょうか。

高田 それから太陽ですね、圧倒的に。それによってトマトの色が。イギリスやドイツのトマトって食べられませんでしょ。大岩 ひどい言われ方ですね（笑）。

**野谷** 本場メキシコのトマトは種類が多いのですが、その中にヒトマテといつて大きいのがあります。果物だと、南欧のスペインあたりのモモや洋ナシは、小さいけれどすごく甘い。ブドウも糖度が高いですね。ワインの原料ですが。そういう食文化と「教養」というのはどうつながるんでしょうか。

**高田** 教養と文化つて、英語でいうと両方とも同じ「カルチャー」ですよ。

**大岩** フランス語でも同じですね。

**高田** 文化と教養を日本では分けちゃったけれども、ドイツの場合も同じですよ。

**大岩** でも、ドイツ語では「ビルドゥング」とも言いますね。

**高田** ドイツ語はゲルマン系の語彙とロマンス語系の語彙を巧みに使い分けて独特の分析的思考をするわけですけども、教養と文化は、やっぱり一つと見做したほうがいいでしょう。やっぱり趣味の問題というか、感性と伝統と、そういう集団的につくってきたものですよ。風土とも切り離せない。

**野谷** もっとも、ヨーロッパの飢えを救い、食文化を作ったのは、新大陸から入ったいろいろな食材ですね。ドイツではジャガイモだけれど、南欧のトマトもそう。

**大岩** フランスではジャガイモが伝えられたとき、最初は家畜の飼料でしたから。人が食べられるように工夫したのがパルマンティエ農学博士です。

**野谷** 江戸時代の甘藷先生こと青木昆陽みたいな人ですね。

**大岩** ええ。それでフランスでも栽培されるようになって、さらにパルマンティエ博士がいろいろな工夫を凝らして料理にしています。ですから、ジャガイモの料理にはパルマンティエという名前がついていることが多いですね。「アッシ・パルマンティエ」という国民料理は、アッシはひき肉ですから、「ひき

肉とジャガイモの重ね焼き」とわかるようになっていきますね。

**野谷** ドイツのジャガイモ料理と比べたら、やっぱりフランスのほうが美味しいのかな。

**大岩** ドイツのジャガイモと比べたら美味しいかもしれませんが。

**野谷** ここで食と「教養」を結び付けたいのですが（笑）。牽強付会は承知の上です。例えば魯山人みたいな教養人が思い浮かびました。食通で陶芸とか書画もやって。もちろんこれは日本のお話ですが。食と音楽や芸術はつながらないのか。つながるとすると、感性によるんでしょうか。シヤリアピンスキーは歌手とつながっていますが。

**大岩** 食に対する視点が国によってちょっと違うのかもしれないと思いますね。

日本の場合だと、食はどちらかというと武士道や、茶道、華道などに近いような気がするんです。フランス料理はどちらかというと「規範文法」という感じでしょうか。だから、文法どおりにつくればある程度誰でもできるけれども、和食はもう少し精神性が入っていると思うんです。やはり感性が物を言う世界なのかしら。

**野谷** 武士道とか禅の世界かな。精進料理とか。

**大岩** そうですね。それに近いように思います。

**野谷** 幕末から明治時代に西洋料理が入ってきますが、面白いのはそこからたちまち洋食という和食の一ジャンルができることです。それは模倣なんでしょうか。ヨーロッパのものを導入するという発想はありますが、導入するとすぐに日本化してしまふ。その一方で、今でもオリジナル志向というか、フランスへ料理やケーキ作りの修行に行ったりする例がたくさんあります。この二つの態度というのはどうなんでしょう。ヨーロッパ

## 「教養」の器と中身

を見て、追いつけ追い越せに学んできたという態度と、日本化する態度。それが矛盾せず同居している。これについて食の専門家でもある大岩さん、いかがですか。

大岩 まずは日本化する態度ですが、これにはそうせざるを得ない理由がいくつか考えられます。まずは食材。例えば、フランス料理では仔牛をよく使いますが、日本ではあまり入手できなかった。そこで他の材料を使う。すると当然のことながら違う料理ができちゃいます。それに味覚の違いも大きい。「日本人の舌に合わせたフレンチ」って聞いたことがありでしょ。日本で受け入れられるには味を変えるしかない。ついでに言う、「お箸で食べるフレンチ」、あれ、嫌いです。いい加減にしてほしい(笑)。味覚に戻りますが、フランスで食べると、たぶん塩気が強いと思われるはずです。でも最近では逆に、海外でワサビやお醤油が取り入れられています。

野谷 そう言えば、投宿先のホテルのテレビで偶然見たんですが、フランスから来たシェフが出汁を取るための昆布を買い付けていました。

大岩 そう、あちらでも和食が認知され、「旨み」が一つの味覚になりつつあるようです。でも和食が世界に出ていくと、あちら風に料理されちゃうのが普通ですね。それから、フランスに修業に行くことですが、やはり本場志向ですね。国際ビジネス学科の佐原秋生先生は日本で初のレストラン批評家ですが、昔は渡仏できる料理人はごくわずかで、佐原先生の本がバイブルだったそうです。今は行きやすいから、本場志向が簡単に実現する。また、特にフレンチの世界では箔をつけるという意味もあるようです。

野谷 なるほど。もっと聞きたいところですが、僕個人の興味になってしまっているのでこのくらいにして、「教養」の話に戻りますと、最初に言ったように、かつての文部省、今の文科省から「教養」という言葉が出てきます。そして「教養」を身につけると言うのですが、そこで言われる「教養」自体が何かというのがはつきりしません。やっぱり定義しにくいのでしょうか。さっきのビルドアップもクルトゥーラも、外から入ってきたものを明治以来日本語に翻訳している。けれども、あくまで翻訳であって、その概念自体は必ずしもきちんと伝わっていないんじゃないか。つまり、ドイツ型でもフランス型でも、あるいは第二次大戦後にリベラルアーツというのがアメリカから入ってきますが、そういうものを含めて、いまだに大学人の間で合意できていないとか、あまり問題にされてこなかった気がします。だから後手に回り、文部省、文科省に教養改善なんて言われてしまう。そのあたりに疑問を持たれたことはありませんか。奥田さん、どうでしょう。

奥田 疑問というよりも、文部科学省から出てくる言葉というのはほとんど空虚な、内容ゼロの記号のようなものです。

野谷 一刀両断ですね(笑)。たしかにいわゆる有識者と官僚とで作文するようですし。

奥田 ええ。だから、あまりそれは真剣に考えたことはないんだけど、大学で、つまり日本だと四年間の学部で何が学べるんだろうという、その問いを発すること自体が大事で、教養という言葉にこだわるんじゃないか、何を学べるのかというその問いを発信し続けるしかないんじゃないかな。だから、それを

抜きにしての定義をいくらしてもしょうがないというのがありますね。

**野谷** まず内容が大事だと。高田さんはいかがですか。

**高田** 一九九〇年代の前半に、文科省は「大綱化」というのを打ち出した。旧帝大系の「教養部」廃止ということです。

私は、まずは大阪大学の言語文化部（つまり教養部）というところに勤めて、その後同じく旧帝大の東北大学文学部、そして東大の駒場・教養学部に移りました。そうしたら、そこで「大綱化」の波を食らってしまった。ほかの旧帝大はさっさと教養部を廃止した。教養なんてのはもうみな嫌だったわけです。なにしろ「パンキョウ」って呼んでいたくらいですから。東大だけは「教養学部」なので、吉と出るか凶と出るかわからなかったが、必然的に死守することになった。ところが、それから十年ほどしたらどうでしょう。潰したところはみんな困って、「教養教育」復活の大号令。死守した東大駒場は、逆に二十一世紀になったら教養学部でさらに輝き出した。時代の様変わりの速さ。内実は何でもない。

さて旧「教養部」の潰れたところが「教養教育」を復活しようとするわけですが、軒並みどこも成功していない。それはきつと「教養」という言葉に精神がないからでしょう。

それを裏返してみれば、そもそも「専門」のほうが空虚なんだから仕方ない。猫も杓子も「改革改革」で、中身は簡単に改革しようがないから、とりあえず看板だけ掛け替える。学部はおろか学科名をやたらに変えてごまかす。それによって内外の社会の変化に追いついている気になっているんだけど、当然かみ合うはずがない。

こういう意味での「教養」という言葉は、一つのファンクシオンで、中身は空虚のようでよくわからないながら、重要な

のかもしれない。まさに（釣りに使う絡み防止の）からまん棒。  
**野谷** 僕は逆に、中身が空虚だからこそ、好きなものを盛り込めるんじゃないかとも思うんですが。甘いかな。

**奥田** そういう従来の、昔の大学の教養教育とか専門教育とかという分け方での教育というのは、全然こだわる必要はない。その上で、それぞれの場所ですね、例えば名古屋外国語大学だったら名古屋外国語大学にきている学生たちに最もふさわしい内容というか、教育内容というのは何なんだろうということをお考え盛り返る器としては、「教養」という言葉は非常に便利です。その中身に何を盛り込むかは、普段から教員同士でディスカッションしながら毎回毎回修正しながらやっているという。

**野谷** デイスカッションは不可欠ですね。羨ましいです。異なる意見がぶつかることで化学反応が起きるからです。制度としてのそれは四年間ですか、それとも二年間？

**奥田** 四年間ですよね。四年間で考えていますね。だから、学科名称の「教養」というのは、そういう教養専門という二年単位の分け方じゃなくて、まさに四年間の教育をどうするかというのを考えていく上では、「教養」という言葉を冠した学科にしたほうがやりやすい。

**野谷** 文科省の「大綱化」ということでは、僕にも苦い思い出があって、当時属していた立教大学の一般教育部が見事に潰されたんです。新しい学部をつくるという動きもあったけれど結局実現しなかった。その結果、一般教育部に属していた教員は他学部に分属することになります。その後時が経ち、高田さんがおっしゃったとおり、あれを潰したのはもったいなかったと気づいて新しい学部が作られるんですが、人材が散ってしまったのをもう一度集めるといった、非常に効率の悪いことをやっ

ています。

「パンキョウ」と呼ばれもする一般教養は、どこか差別の対象になっていた。そのため実体がないにせよ、大学では「教養」という言葉にあまり良いイメージはなさそうです。すると、今復活している「教養」っていったい何なんでしょうか。

奥田 制度としてはその問題と、もう一つは、最近の問題だったら、全国各地に「教養」の名前のついた学部学科がいっぱいできていて、特に私学ですね、これはある種傾向性がはっきりしている。語学教育を実施しますというので、授業を全部英語でやるのを売り物にしている学部学科が大半ですね。それもある意味で従来の大学の制度としての教養教育というのは何かわけがわからなくなっちゃったので、自由に器の中身を盛れるというときに、「教養」という言葉を使って、それで何が一番売れるかその中身を考えたんじゃないかなと思います。だからその二つの前提があって、その上で、だけどそうじゃなくて、我々の教養教育というか教養学科としての中身は何があるのかという、むしろそういう問題を真剣に考えるための反面教師として我々は考えたいというのがありますね。

野谷 まさにそうですね。まだこちらに来て間もない高田さんも現代国際学部ですけど、僕は外国語学部と現代国際学部とでは語学に対する考え方がちょっと違う気がします。そのあたりはどう把握されていますか。意識的に変えているとか、あるいは自分たちは自分たち流にやっているんだという感じですか、奥田さん。

奥田 我々が考えたのは、学生が何を望んでここに来てくれているか。そのときに、一応本気でどこまで四年間突き通すかわからないですけども、学生たちにはある種の将来像、イメージがあります。それは多くの学生たちにとって、必ずしも、例

えば英語教師になるとか、英語そのものを使う仕事を自分の将来の仕事にする、あるいは英語名称の職業に就くというのではない。けれど希望としては英語を使えるようになりたい。ただし、あくまでもそれはツールとしてであって、その上でこういうところをやってみたいとかあいうところをやってみたいという希望を持って入ってくる一年生が多いので、その希望を「それはだめだ」と言うんじゃないで、その希望を含みながらどう対応してしっかりとした英語を学んでもらえるかを考える。それから、学んだ上で社会人になるときに具体的にどういう力をつけてもらうか。そういう発想でやっていこうとか話し合っている毎日ですね。

野谷 大岩さんのところはフランス語学科ですが、扱っているフランス語についてはどんなふうに考えていますか。

大岩 フランス系なので、まずどうしても意識するのは「ケセジュ」ですね。十六世紀のモンテーニュのことばです。自分が何を知っているのか、という自問自答ですね。自分は何を知っているのかということから派生して、自分が何者なのかということをも自分で問えるような、客観的に自分のことを判断できるような、そういう教育をしているつもりではあります。問いに対する答えを見つけるよりも、問いを発見する方が難しいですから。また、今のようなネット社会ですと、「この情報は本当なのか」といった疑う力が大切だと思いますね、簡単に騙されなために。

野谷 メディアリテラシーですね。

奥田 そう。ただ、現行のカリキュラムがこの目的に合致するように、きちっと配置されているかどうかと言えば、まだまだ改善の余地はあると思います。「新しい教養」と言えるような、自分から課題を発見したり、周囲の人に自然に働きかけたりす



る能力を涵養するような授業はまだまだ少ないですね。やはり、ややもすると語学の方に力を入れ過ぎているかもしれないですね。ただ、一応先ほど申し上げた目標、つまりポリシーを持つてやっているということですね。

野谷 それは英語で言い換えるという意味が違ってきますか。

大岩 いえいえ、たまたまクセジュがフランス語ということであって、これはもしかしたら「教養」とは何かというのにつながるのかもしれないですね。

野谷 やつぱりそこにはある種の知というものがうかがえますね。

### 実用主義にあらがって

野谷 高田さん、岩波新書の『キケロ』だったかな、高田さんが書かれた後書きを読むと、日本の学問研究の対象が明治以来先進的な近代ヨーロッパに偏り、それも富国強兵と実用主義に結びついていてと強く批判されていますね。そして戦後は、日本再建のために研究対象がアメリカにシフトしたと。ざっくり言って、「教養」や語学教育もまたそうなりかねないということでしょうか。

高田 随分前の本ですので、忘れてました。

野谷 今よりはるかに戦闘的な感じですよ（笑）。

高田 何ていうんだろう、いつの間にか「近代」がどこかで終わったわけですね。「ポストモダン」という、八〇年代では流行り言葉かと思っていたんですが、でも実際、今学生たちの動態とか世の中を見れば、完全にポストモダンです。このことを語学教育ということに当てはめてみると、奇妙なことが

分かります。

つまり、我々の近代の最初には、たとえば東大の前身にあたる大学では、外国人数員がほとんどで、しかも英語カドイツ語で授業をやっていた。そこで最初の総長に当たる加藤弘之は、国民から非難を受けて、国税をこれだけ使いながらまるで洋学校じゃないか、と言われた。加藤はえらいもので、二、三年で教科書を日本語にするし、教員も例えばラフカディオ・ハーンに代わって夏目漱石をつけるなど、国産品愛用に切り替えるのです。これが近代化にほかなりません。日本は非西洋で西洋モデルを国産化するのに成功した唯一の国だったわけ。「近代化」は太平洋戦争という過ちへも導いた張本人ですが、戦後も「国際化」の標語の下にもう一度アメリカ的近代化をやってきた。そうしたら、いつの間にかポストモダンになり、グローバル化の大波を食らって、人々が叫び出したのが英語で授業をしなければいけないということ。「近代化」の反省など誰もしやしない。この空回りぶりは見事としか言いようがありません。



奥田隆男氏

なぜこんなお寒い状況かといえは、日本がそもそもグローバル化の中でどういう立ち位置で、どう振る舞うかということが何にも決まっていないからです。秋田に元祖を仰ぐ「国際教養」にしてからが、アメリカ流のリベラルアーツカレッジを真似てみるという話ですよ。明治の近代化当初と変わらない。またぞろ外国人を入れて英語でやるというわけですから。ただそれについて、ポストモダンの日本は文句を言わなかった。逆にやってくれと言っているわけです。明治の日本のほうが正常だったとは言いませんが、文化の臍とでも言いましょうか、腹がまったく坐っていないと思います。

もちろん、なんたつてポストモダンですから、英語で授業をやるにこしたことはないみたいなきことはあると思うんですよ。でも、一〇〇年とか一五〇年ぐらいのスパンで考えたとき、これでいいのかなと、やはり考えざるをえない。「教養」も、もし知的にも文化趣味的にも、ひとつの洗練を要するものであるならば、その中心に自国の文化がでんと構えていなければいけない。そういう問題が本当は問われているのに、そこは恐ろしく腑抜け状態で、馬鹿の一つ覚えじゃあるまいし、とにかくなんでも英語でやればいいと思ひ込んでる。

大岩 今、グローバル人材イコール英語ができる人という形になっています。

高田 そうなんですよね。全くの単細胞。しかもイギリスでもアメリカでもない、文化歴史抜きなんです。世界英語 World Englishes という概念です。絶対的文化相対主義ここにきわれり。その意味では、誰が付けたか知りませんが「現代英語」というネーミングは、「国際教養」の横に配して、なかなか老獪です。文化と歴史に裏打ちされた「教養」概念とは一線を画します。

野谷 慶應の藤沢キャンパス、その後追いで早稲田に国際教養学部ができましたね。ああいう動き、どう思いますか。

高田 実態はもとより分かりませんが、グローバル化のなかでの日本の立ち位置を定めた上での学部構想であれば、大いに期待できるでしょうが、そうは見えません。そういうマニフェストを算聞にして知りません。卑近なところで言っても、東洋ないし日本の事情に関して、英語で自由に支障なく授業ができる日本人スタッフがまずほとんどいないのが実情です。まあ、そこに救いがあると思いますが。

野谷 逆説的にですね。

高田 そう、逆説的に。

野谷 内容を忘れてしまったとおっしゃいましたが、同じ解説の実用主義批判の中で、とりわけ成果主義というものに対して厳しく批判されています。一般的に考えて、やっぱり成果主義というのは我々にとつて大きな負担ですし、プレッシャーになります。奥田さんのところはそのあたりいかがですか。

奥田 そういう方向、つまり実用主義の方向に向いていると思われがちですが、さっき言ったように、中身がゼロのところ得名前を借りてやっているの、実際に我々が学科会議、教員同士で話し合っているのは全くそれと逆ですね。

学生が具体的な思考、何かになりたいとか、こういう力を身につけたいとか、実用性としてそのための努力を学生がすることとをとがめる理由は何もない。むしろそれは促すし、手伝うことはしないといけないだろうけれども、でも、実は、そういう力を身につける、さつき高田さんがおっしゃったのと全く同じで、本当の力が身につくときに、英語で何かやれば全部身につくんだとかいう実用主義的な発想で勉強していると、実はつく力はものすごく乏しいものしかない。本当に力がつくのは、そ

れを毎日毎日学生と話し合いながら、自分が納得してこれを勉強しようとかこういうものを学ぼうという気になったときで、さつき大岩さんがおっしゃった、まさに「クセジュ」という疑問を自分の中に発するようにならないと本当の学びにはつながらない。そういうことを毎日やる。ただ理屈として言っても通じないから、ダイアローグを繰り返しながらやるしかないなど。そういう発想でやっていますけれども。

野谷 それは時間がかかりますね。

奥田 時間がかかります。ものすごく時間がかかります。

野谷 外から見た場合、どうなんですかね。それは遅いというか、もつと早くしろと言われませんか。それこそ即効性のようなものが要求されているんじゃないかと思うんですけど、それをどうやってはね返しているんでしょうか。

奥田 これは本当に、我々発足して三年たちましたけれども、実感しているのはそういう即効性の問題で、一年生で入ってきたときに、それこそ英語でかなり流暢に話している学生がいて、すごいねと言って見ているんですが、実は、話す内容はほとんど中身がなかったりする。そういう学生が横で英語をしゃべっているのを見ながら、私はできないというある種コンプレックスを持った学生でも、私は何ができるんだろうという疑問を持って勉強していると、二年三年たつたら、流暢さではやつぱり叶わないかもわからないけれども、実は書いてきたレポートの内容とか発表したものの内容とかが、明らかにほかに質のいいものを出してきたりするんです。だから、四年間というのはある意味で限られた期間ですけれども、時間的には結構あると。その時間をたつぷり使って、目標を立てて我々はやっていて、そういう「クセジュ」というのを感じられる学生が、全員がそうなるかどうかかわからないですけれども、何人かずつ出て

きて、それが起爆剤になって、他の学生たちにいい影響を及ぼしている。

野谷 今日お話をしてよかったのは、今おっしゃったことを聞いたことですね。言質を取りました(笑)。たぶん外からは正反対に見られていると思いますから。

高田さんは沓掛良彦さんとの共訳『エラスムス・モア往復書簡』の解説で、渡辺一夫の言葉を引用しています。「現実に奉仕し、その奴隷となる学理は、曲学阿世のものである。そして、現実が学理に奉仕し、それによって導かれることを求めるのは、曲学阿世を望みえぬことである」。そして後者こそエラスムスやモアが生涯求め続けたと高田さんはおっしゃっています。すると、現実に奉仕しないためにキケロのような古典を研究をされたのでしょうか。

高田 もう長い間「表象文化論」という、それこそ瓢箪なまづみみたいな、定義不能の超学際的な講座に張り付いておりましてので、それこそ自分でもよくわからなくなっています。西洋古典学は僕の学問にとつて土台(インフラストラクチャー)であることに間違いありません。

野谷 伺いたいのは、例えば東大だと本郷に西洋古典の拠点がありますが、学生はほとんどいない。だけど学科として残しておくというのは、極端に言えば、現実に奉仕しない大学の良心みたいなものですね。高田さんご自身の経験から、どうしてそれをやろうと思ったのでしょうか。ギリシアやローマに接するきっかけが何かあったのでしょうか。

高田 世にいわゆる高校時代に、加藤周一に出会ったことは申し上げました。ヨーロッパ文化というのは重層的で、いずれどうしてもギリシアとローマに逢着せざるをえません。で、いつそ西洋古典学を専門としたかったんですが、その道で食ってい

くのはきわめて難しい。なにしろ西洋古典学というのは日本で旧帝大に講座が三つしかない。そこで節操のない僕は、就職にもっとも有利な英文学にヒョッテ、ただギリシア・ラテンの古典に一番関係のあるルネサンス期の英文学をやることにした。それでまんまと旧帝大文学部に職を得て、表向きは中世・ルネサンス英文学を専門としながら、しかしサイドビジネスで古典学なかでもラテン文学・ローマ思想をやっていた。東京に帰ってからは、表象文化論ですから、勝手に「表象古典文化論」と称して、小さな夜店を開店しましたが。しかし恐らく野谷さんのご質問の狙いは、制度と学知との関係、制度というものがありうべき知の内容と枠組みをゆがめる、ということじゃないかと思うんです。

昔の「パンキョウ」と言われた、それこそイメージ悪いんだけれども、あの制度によつて公の知の枠組みからはみ出たところが実は守られていた。それが「大綱化」によつて崩されてしまったということが一番大きな問題で、恐らくそこではないですか。

野谷 結局売れるか売れないかで判断される。つまり、大学に自由があつたときは売れないものでもやっていけたけれど、大学の自治が弱まってくると、外圧にやられちゃうみたいな。

高田 それからもう一つは、昔は例えばフランス語やスペイン語の教師でありながら、それは世を忍ぶ仮の姿で、実は一流の文士とか文学者つていたじゃないですか。そういう姿がもう見えなくなつてしまった。専門専門と草木もなびく、それこそ出世御利益的な専門論文を書かざるを得ないご時勢となり、必然的に本当の文化教養は死んでいく。

野谷 僕もここで死ぬのでしょうか（笑）。

高田 ですから、世界教養とか国際教養というのは、あらまほ

しきは何でしょうかね。放つておいたら出世御利益的な専門主義や実用主義でやられちゃう大事な価値を掬い取り、それを養い伝えていくところ。そういう場所でしょうか。もっとも、出世御利益的な専門論文さえ書かない、大学人の風上にも置けないなんてのも目に付いたりして。

野谷 奥田さんはジンメルがご専門でしたね。

奥田 そこまで調べてる。

大岩 怖い（笑）。

野谷 それでは、ジンメル研究者の文章ですが、ジンメルの書いたものは浅薄な合理主義批判として読めるといった表現が出てくるんですね。ということは、やっぱり奥田さんの姿勢もそういう姿勢だととらえていいんでしょうか。

奥田 合理主義は何かというのがよくわからなくて。私は大学院で最初に研究したのがマックス・ウェーバーで、まさに合理主義そのものの問題を扱っていて。それこそ、今おっしゃった浅薄な合理主義ですね。そのところを十九世紀のあの時代の、ウェーバーにしろジンメルにしろ、あの辺で社会学を始めたメンバーというのは、世の中の趨勢として、さっきの「教養」の問題じゃないですけど、まさに浅薄な合理主義が世の中を覆つてきている中で人間というのはどういう可能性があるんだらうというのをもう一遍考えようとしたというのが社会学の始まりの一つかなと言えますから、感じるどころがありました。だから、ある意味で社会学は非常に雑多な学問で、何でも入ってきていて、何をやっているかわからない。今の、先ほどの「教養」で私が申し上げた、ゼロの虚ろな、空虚な記号と同じような感じ。それは逆に何でもできるんじゃないか。そういう可能性がある場所を今の時代、どこかでつくっていくしかないかなと感じています。

野谷 その「浅薄な」という部分を取り除いて、浅薄じゃないものにするためにはどうしたらいいですか。

奥田 やっぱ人間の営みとして食べていけないといけないし、食べるためには、今の時代だったら稼がないといけない。その前提の中でどういう可能性があるか考えていくしかないの。その大前提の「食べる」ということをまさに浅薄に追いかける人が当然出てくるだろうし、それが世の中のさっきの制度にしようという動きも当然出てくるでしょうから、それをひっくり返すというのはなかなか簡単なことじゃないし、そもそもひっくり返そうとしたことがまた新たな制度をつくっちゃって、逆に浅薄な方向にどんどん行ってしまうということも我々経験しているわけですから、むしろそれはひっくり返すんじゃない。そういう流れの中で何か見つけられるものとか守れるものとかを探っていくという、そういう姿勢しか続けられないんじゃないかという気はしています。

野谷 奥田さんは、例えば大学における芸術教育なんかはどう思われますか。その浅薄とのかかわりで。

奥田 どんどん追い詰められてる（笑）。

学科の話をしますけれども、カリキュラムとして演劇とダンスを授業として取り入れていますね。芸術というのは人間がやる表現の一つだしたら、世の中にいろいろなもの、意味と言っているのか感情と言っているかわからないですが、それが込められているだろう。実際に自分で体を動かしてそういうものにかかわる場とか時間というのを学生に提供したら、それがどういう化学反応を起こすのかなという。そういう場をつくるのも、我々の教養教育の一つの責務じゃないかという意味では、芸術をどんどんやろうよとか、見ようよとか、経験しようよというのは結構言っています。ですから、私のレベルなんか

だと、例えば日本文学を研究テーマにしている学生が出てきて、私は全然そんな資格ないんだけど、でも、「何でもいやらやれ」と言って、勝手にやらせていただいています。

野谷 実用主義と真逆ですね。

奥田 真逆です。全然役に立たない。

野谷 なるほど。でも、そういうことをやるのも一つの教養教育になりそうですね。

奥田 そうですね。例えば、先ほどの少数で授業をやれると。そうすると、それぞれの学生が何をやっているかお互いに見えます。一方では本当に実用主義的な勉強といたらないのか、そういうところに関心が集中している学生もいて、片方では全く世の中の役に立たないかもわからないことをやっている学生がいて、それが同じ次元で日を変えて発表したりするときは、聞かざるを得ないわけです。それでまた何か感じるものが出てくるような。

### 体の中に音楽が流れる

野谷 奥田さんはご自分で何かされますか。楽器の演奏とか。

奥田 私、遊ばない人間です。遊ばないというか遊べない。

野谷 ホモ・ルーデンスじゃないんですね。大岩さんはその反対ですごく多彩ですね。

大岩 いえいえ、それほどじゃありません。

野谷 ピアノ、フルート、バレエ。音楽もやっていらっしゃるし。それがご自分の教えていることとどう結びつくかに興味があります。

大岩 ピアノは三歳から十五年ぐらい、バレエが七年ぐらいで



しょうか。フルートは中学まで。声楽はここ五年ぐらいやっています。音響学がひとつの研究分野なんですが、研究中に人の「歌声」に興味をもったことで、自分が声楽を始めてしましました。いつか自分の歌声を研究対象にしてみたいですね。音楽やバレエは親が情操教育としてやらせた感じですね。ピアノは英才教育を受けていたようですが、残念ながら実を結びませんでした。でも、こうした習い事では、無意識に潜在化された記憶、身体知というんでしょうか、幼い頃からやっていたからこそ身についたものだと思います。それが今の感性とか美意識に結びついていると。授業の中ではある程度そういう芸術的な話もします。反応する学生とそうでない学生がいますが、それぞれの経験による場所ですね。あと、狂言の会にも入っていて、学生に実演を観せに連れて行ったりもしています。

ところで、名古屋能楽堂の鏡板、舞台の背景の絵ですけど、普通は老松ですよ。でも、名古屋は若松なんです。杉本健吉さんが描いたんですが、定番は老松なのにここでは若松にしたということで大変な物議を醸しました。名古屋の伝統芸能は成熟していなくてまだ若いから若松を描いたと誤解されたんです。でも、実際には非常に伝統のある芸どころで、伝統は承知の上での新しい試みだったのに、それが名古屋から発信されていない。文化が根づかないと言われていますが、必ずしもそんなことはない。そういうことをこちらでも発信して、学生に伝えていかないとけない。奥田さんの学科でやっていらっしゃるようなことを学生に与えて刺激する必要がありますね。

野谷 そのフィードバックみたいなのはありますか。

大岩 学生からですか。

野谷 学生に文化を発信したときに。

大岩 ありますね、結構。やはり、実際に経験させることが大

切だと思っています。見せたり聴かせたりしておけば、先ほどの話のように、なんらかの引っかけがある。普通は絶対とらないような音楽の授業でも、受講したいという学生が出てきますから。

野谷 単位のためじゃなくて。

大岩 そうではないと願っていますけど。

野谷 それで自分が何か豊かになるといった具体的経験はありますか。

大岩 芸術によってですか。もしかすると感受性は豊かになっているかもしれない。これは共感力といったことにも繋がります。人に働きかける力になっているような気がする。それに、言い方はともかく、いつも体の中に音楽が流れている感じなんです。これは精神や情緒を安定させるのに役立っているそうです。

野谷 今日の状況で精神を安定させるのはとても難しいですからね。

大岩 そうですか。私は音楽のおかげで安定しています(笑)。

野谷 高田さんはご自分で何かされますか。

高田 情けないことに、僕は全て受け身でして。スポーツから芸能まで全部。そのかわり、なんでも好きですね。

野谷 見るほうですか。

高田 見るほうですね。

野谷 それでストレスが解消できてますか。

高田 ストレスの解消はもっぱら酒ですが。ただ今は酒が飲めなくて。

野谷 それがまたストレスになる(笑)。大岩さんが今おっしゃった、自分の中で音楽が鳴っているという感覚がよくわかります。僕は小学校のときにバイオリンを習ったんですが、

ジュニアオーケストラに入っていたので、そのときの音がまだに耳に残っているんですね。それがあることですごく救われている。リアルな現実ってつらいですよ。だけど、その体験によって昔に戻れるし、そのためのツールのような気がするんです。そういうことを学生に教えてあげたい。もちろん学生は学生でそういう何かを持っているでしょうけれど。これも「教養」といえば教養かなと。

高田 ノーベル賞をとったニュートリノの小柴先生がすごくおもしろいことをおっしゃっていて。ニュートリノは自分じゃなくとも、いずれ誰かが発見するものだ、物理学とはそういうものだ。だけどモーツアルト、バッハは彼ら天才の存在なくしてはあり得ない。

つまり、稀有なる先達の天才が残してくれたものですよ。それを知ると知らないのでは全然違うわけです。恐らくそういうものが「教養」の重要な源泉であることに間違いありません。教養は、客観的法則でもなければ、完全に価値相対的なものでもない。

大岩 音楽は歴史そのものですね。

野谷 実は、この座談が載る Artes MUNDI 創刊号に、今年度で定年退職される現代国際学部の塩見治人先生の文章も掲載する予定なんです。モーツアルトに詳しい方だと大岩さんから聞きました。そのモーツアルトを果たしてこの大学の中で活かせるのかという問題があるのですが。果たして塩見先生はモーツアルトに関して何か残せたのでしょうか。

大岩 塩見先生の話は、奥田さんのほうが詳しいんじゃないですか。

奥田 そういう話は私ではついていけないから、遠慮しているほうなんですけれども、ただ、どうでしょうね、残していった

かなという疑問を持つような場にはしないというのがありま  
すね。

それは塩見先生も感じておられて、例えばどういう映画を見たとか、どういう本を読んだかといったことを学生自身が積極的に発信するように仕向けておられる。これも、やっぱりその必要性を感じておられるからでしょうね。

残せるか残せないかは可能性の問題ですけども、でも、言わなければ、確実に学生は反応のしようがないですね。知る機会がなければ。

例えば、この間も学生と話をしておもしろい経験をしたのは、現代英語と国際教養では毎年一年次にオペラ鑑賞をしていますよね。以前音楽をやっていた学生は、私たちが見た舞台のあそこがよかったとかと言うんですね。全くそういう経験がなくて初めて舞台を見た学生の感想と小さいときに音楽をやっていた学生の感想とは違うし、それをまた横ではかの、そういう経験がない学生が聞いているわけです。そういう相乗効果が持てるということは本当によく感じるので、やっぱりそういう場を提供しないといけない。まさに大学はそういう場であるべきじゃないかということを感じます。お金と時間がすごくかかるものではありますけどね。

野谷 我々世界教養でも、今度バレエを鑑賞します。演目は「ロミオとジュリエット」で、大岩さんに解説をお願いしました。

大岩 無茶ぶりされました。

野谷 すみません。でもロイヤルバレエですからね。きちんとした解説がないともったいない。費用は大学が持ちますし（笑）。

大岩 それはそうですね。

野谷 研究室にトウシューズが置いてあるのを目撃したので、ついでに踊ってほしいところですが。

大岩 まさか授業では踊りませんよ（笑）。

## 新たなビジョンを求めて

野谷 奥田さんが相乗効果とおっしゃいましたが、それが教員と学生、あるいは教員同士の間でも共振してくれる場になると本当にいいと思います。教養はそうして刻々と作られていくものかもしれませんね。さて、そろそろ終わりの時間が近づきました。

高田 いや、グローバル化と多文化主義という手垢のついた概念について話さずには終われません（爆笑）。グローバル化といえば英語一辺倒という状況で、その他の言語はほぼ横並びになっちゃっている。かつて不動不滅の合言葉として「巨人・大鵬・卵焼き」と言われた時代に、フランス語フランス文化も同様の地位を確保していた。ところが今はとつくの昔。ドイツ語にいたってはそれ以前に沈没。スペイン語は実用主義でしばらくもっていたが、これも同様に斜陽となった。

で、今は英語しかもコミュニケーションの英語のほとんど一人勝ち。こういうきわめて一枚岩的な、単調で無色透明で人畜無害といった、いわゆるコミュニケーションの実用外国語の世界になったときに、対話の文化というのをどうするか——「対話」というのはプラトンの「対話編」の意味での「対話」ですが——、この重大な事柄についてなんらビジョンが示されていないと思うんです。一方、多文化主義とか言っているけれども、具体的には歴史と伝統があるおのの文化が厳としてあ

るわけですよ。それについて外国語大学としては、あるいは世界教養としてはどうするのかという、まさにビジョン、野谷ビジョンを。

大岩 野谷ビジョンをぜひお聞かせくださいませ。

野谷 困ったな。僕は学科長ではありません（笑）。僕が前倒して一年前に来たときには、世界教養のプランはすでに出来上がっていましたからね。だからあくまで一個人としての見解です。

スペイン語は実用主義だと高田さんはおっしゃいましたが、日本でのスペイン語受容の歴史というのはまさにそうなんです。蕃書取調方に起源を持つ東京外語大の前身、外事専門学校などでスペイン語は商業や貿易の言葉として教えられてきた。一橋大や神戸大も事情は似ています。まさに実用語なんです。軍人で総理大臣も務めた山本権兵衛が若き日に南米雄飛を唱えています。要するに目的は資源の獲得でした。それから時が経ち、現代になっても、中南米に行くのは資源を求めてか製品を売りに行くかで、スペイン語を携えて渡るのは商社マンか企業から派遣された人々です。

僕は受験に関してはうぶもいところで、ここの学生ほとんど世の中のことがわかっていなかったと思う。東京外大のスペイン語科は実は滑り止めなんです。だから受かっても目的がない。先入観ゼロだから、授業が語学ばかりでもそういうものかと思ってました。入ったところ、商業スペイン語の授業が学生の反対によって廃止されたんですが、その意味もよくわかっていなかった。今思えばいわゆる産学共同に対する反対だったんですね。今、グローバルゼーションと新自由主義で世の中は一八〇度ひっくり返っちゃいましたが、それにはずっと違和感を抱いてきました。親が小学校で国語を教えていたせいか、文学は

好きでしたけれど、実学的なものには興味がなかった。だから大学選びは間違いでしたね。当時のスペイン語科というのは、文学は講読でのテキストでかじる程度、それも古典です。しかも、たまに現代の作品に触れてもフランコの時代でしたから、検閲があつて面白くない。このあたりの自分史を語るのは初めてじゃないんですが、はしょって言えば、卒業後をしつかり見据えた他の学生たちとは全然違つていたと思います。いわゆる就職をしたくなくて、それで大学院に進学しましたが、研究に目覚めたわけでもなかった。スペインがつまらないから、ゲバラが英雄的に死んで話題になつていたラテンアメリカに目を向けたという感じです。ただ若かつたし、スペイン内戦やキューバ革命、チリのクーデターなんかには関心がありました。でも、進学するとき、教師からラテンアメリカ文学じゃ食べていけないよと繰り返し言われたら、僕も奥田さんのように天邪鬼なんでしょうね、意地を張つてしまい、誰も面倒を見ないというから、じゃあ自分でやると宣言してしまいました。僕は政治的には奥手だつたけれど、集会なんかにはよく出ていたから、いつの間にか当時の政治的熱気に感染していたようです。大学院に入ってから、コンパでリベラルを自認する教師の偽善を批判してしまつたんです。政治の季節はほぼ終わつていたから、周回遅れの反抗ですね。そうしたら本当に面倒を見てもらえなくなつたばかりかいじめにも遭つた。だから今でもいじめのニュースには心が痛みます。それでも意地を張り続けていたから、ラテンアメリカ文学の〈ブーム〉というのがやってきて、いつの間にかその最前線にいました。

高田 なるほど。でも、そのもとはやつぱり富国強兵ですよ。

野谷 まあ、そうですね。なんだか追いつめられている気がする（笑）。

高田 イタリアもそうでしょ。どうしてもドイツ、フランス、イギリス、英米つまり列強、それでずつときた。学長のロシアは少々異例なところで原初的というか根源的なところがありますが。ともかく、そういうのが一夜にしてポストモダン状況に陥り、今の平板な状況になった。こういう遺産と、それから我々の今いる立ち位置との関係で、外語大としてはそういう言語をどうするかという方策について、ビジョンを出す必要があるのではないだろうか。

いわゆる第二外国語は、どんな学生が興味を失っているわけですよ。英米も、絶対的価値相対主義の御旗の下、目指すは文化のない英語でしょ。いずれシェイクスピアなど教える場はなくなる。しかし、そうすると、文化の一番濃密なところで言語教育は撤退を決め込むばかり。まさに奥田さんがそこが「教養」とおっしゃつたところで拱手傍観。

ドイツ語のできる人が今すごく少なくなっているでしょ。本格的な人文社会学にとつてドイツ語が読めないというのは致命的ですよ。ポストモダンの煽りを受けて、言葉から歴史と文化が切り離されるという、言語教育から歴史と文化が削がれつつあるという状況にあります。それについて外語大としてどうするか、結構深刻な問題ではないでしょうか。

野谷 それは本当に重要だと思います。今年度まであつた「世界の文学」という科目が総合教養の廃止とともになくなります。が、世界教養のカリキュラムを見ると、それに相当するものがないのがつくりです。

高田 ドストエフスキーも教えられないのですか。

野谷 それもなくなるはずですよ。亀山さんが策を講じない限り。

高田 そこは飛び地なんじゃないのかな。

野谷 でも実際、何かやろうとしても個の力では難しい。協力



者というか共感してくれる人が集まって声を上げないと動かないと思う。学生のサークルにたしか文芸部はないし。正式に決まったのかどうか、亀山さんの肝いりで外国語劇をやるという噂はありますが。

高田 もっとも、文学というものがもうほとんど絶滅種になりつつある形勢ですから、亀山ドストエフスキーはちよつと異例なのでは。

大岩 学生たちは読んでるでしょうか。

野谷 僕のラテンアメリカ文学の受講生は、学科は様々で四十人ですから絶対数としては少ない。でも早稲田の教育学部の受講生より多い。もっとも文学部では一三〇人くらいいましたけれど。ただ、文学の授業でも講義より読ませたり書かせたりすることに活路が見いだせる気はしました。というのも、この講義でテキストを読ませて短いコメントを書かせることを繰り返して、最後にある短篇小説の続きを自分で考えて書くということをやらせたら、実に個性的で面白いものを書くんですね。びっくりしました。それもあってかレポートも、例年に比べ、と言っても二年目ですが、実に出来がいい。これなら文学を使ったりテラシーかクリエイティブライティングの教育になるのかなと思ったほどです。ただ、そういうカタカナの名称に回収されてしまうのは残念な気がします。何だか文学擁護を訴えてしまったようですが、要するに「教養」とは自発性や創造性を養うことじゃないかと。世界教養に來る学生は個性的で知的好奇心が強く、混淆文化のたくましさと自発性も備えている。画一化や一元性より多元性を求めている気がします。つまり世界の多様性を認識し、先進国だけでなく世界に生きる様々な他者と付き合っていける。またそうした他者が育んできた文化を知り、その価値を認める。それに批評力が不可欠だと思います。

教員の中にはイスラームや東南アジアに強い人もいるので、語学の出來不來に回収して型にはめてしまうのではなく、学生の持つそうした能力をむしろ積極的に伸ばしたいですね。こう言くと文化相対主義のように聞こえるかもしれませんが、しかし高田さんには申し訳ないけれど、そのテーマはここでは展開できそうにありません。またの機会に譲りたいと思います。

高田 そうですか。文学

という言葉が恐らく悪いのかもしれないので、「教養」という言葉で。それもだめ、あるいはさらにだめかもしれない。何か別のことを、まずは制度を離れて宣言を作りましょう。

大岩 マニフェストですね。

野谷 どうやら結論が出たようです。そう簡単に行くとは思いませんが（笑）、何よりもまず意識を持つことですね。それでは、これ以上こちらに振られないうちに、司会者の権限で本日の座談会を終わらせていただくことにします。みなさん、長時間どうもありがとうございました。刺激がありすぎ、失礼な点も多々あったと思いますが（笑）、どうかご容赦ください。





(のや ふみあき、 たかだ やすなり、 おくだ たかお、 おおいわ しょうこ)

二〇一五年十二月十五日 第一会議室にて

(写真撮影 瀬古写真館)

## 座談会を終えて

学部が異なることも原因で互いに会ったり話したりする機会がなく、高田先生、奥田先生とお話するのは今回が初めてだったが、介入する司会者が煽った(煽られた)せいか、座談会は予想以上に盛り上がった。その反面、当然ながら筋書き通りにはいかなかったことも確かだ。とはいえ、そのほうがいいに決まっている。予め仕込んできたスタティクな座談会は取ってつけたようで面白くない。何が飛び出すか分からなかった現場の雰囲気伝えるためにところどころ(笑)を入れたが、本当は(爆笑)を含め、もっと入れたほうがリアルな感じがするほど、シリアスながら楽しい議論が交わされた。ついでに言えば、終了後、場所を変え、食事をしながら繰り広げられた無礼講の席では、ワインも入ってリラックスしたため、ピー音で消されてしまいそうな過激な発言や傑作な話が飛び交い、笑いが絶えなかった。

学内には教員同士が学部や学科を越えて横断的に話せる場が、いわゆる会議をのぞいてほとんどないことに改めて気づかされる一方で、今回のような座談を成り立たせる要素こそが各人が身につけた「教養」ではないかとも思った。タイトルを「教養をめぐる冒険」としたのは、大状況での「教養」について批評的に考え、また小状況として、学内再編における「教養」について考えるという二重の思考の試みを冒険に喩えたか

らだ。ことによると、ここに聖杯伝説や村上春樹の小説の木霊を感じ取った人もいるかもしれない。いずれにせよ、「教養」とは他者に対する敬意と知的好奇心から生まれるものでもあるだろう。どなたかが〈談論風発〉〈喧々諤々〉の放談と四文字語で形容しそうなこういう状況と場がもつとあってほしい。時間の都合で多文化主義についての高田理論を展開していただけなかったのが残念だが、いずれその機会を作れたらと思っている。この座談会の記録を読んで共感してくださる読者がいれば幸いである。

(野谷)